

授業改善のためのNIE（社会科と家庭科を中心に） —群馬県邑楽郡板倉町立北小学校NIEシンポジウム2011の記録—

所澤 潤¹⁾・赤池 幹²⁾・飯塚利夫³⁾・石田成人⁴⁾

¹⁾ 東京未来大学こども心理学部（当時：群馬大学、群馬県NIE協議会会長）

²⁾ 日本新聞協会NIEコーディネーター（当時）

³⁾ 邑楽町立中野東小学校校長（当時）

⁴⁾ 東京未来大学モチベーション行動科学部非常勤講師（当時：板倉町立北小学校校長）

Use of NIE to Improve Curriculum and Instruction
in the Social Studies and Home Economics Classroom:
Record of Symposium 2011,
Itakura-Machi Kita Elementary School in Gunma Prefecture

SHOZAWA Jun¹⁾, AKAIKE Miki²⁾, IIZUKA Toshio³⁾, ISHIDA Narito⁴⁾

¹⁾ Tokyo Future University, Ex-Chairman of Gunma Conference to Promote NIE

²⁾ NIE Coordinator of Nihon Shinbun Kyokai

³⁾ Former Principal of Ora-machi Nakano Higashi Elementary School in Gunma Prefecture

⁴⁾ Tokyo Future University, Former Principal of Itakura-Machi Kita Elementary School in Gunma Prefecture

（2014年11月26日受理）

キーワード：NIE、板倉町立北小学校、授業改善、社会科教育、家庭科教育、新聞教育、メディア教育

Keywords : NIE, Itakura Town, Curriculum and Instruction, Social Studies Education,

Home Economics Education, Media Education

（解説）

執筆担当 所澤 潤

本稿は、群馬県邑楽郡板倉町立北小学校（以下、板倉北小）が同校のNIE実践を発表するために、2011年（平成23年）10月25日（火）に実施したシンポジウムの記録である。板倉北小は、10月21日（金）、22日（土）、24日（月）に「北小オープンスクール」を実施し、保護者と地域に、NIE授業を含む学校公

開を行ったが、シンポジウムは、それに引き続いて最終日の翌日に実施されたもので、会場に集まった出席者は約60名であった。

板倉北小は、日本新聞教育文化財団によるNIE実践指定校として、2009年度から2011年度にわたって3年間全校を挙げてNIE実践に取り組んでおり、シンポジウムはその成果を公開するために実施したものであった。シンポジウムは第2年度の2010年10月

26日にも行われており、第3年度2011年のシンポジウムは第2年度を発展させた内容である。なお第2年度の記録は、すでに2012年3月に筆者外4名で発表した⁽¹⁾。

第3年度のシンポジウムは、板倉北小と邑楽郡社会科主任会との共催の形でNIEコーディネータの赤池幹及び邑楽郡社会科主任会会長の邑楽町立中野東小学校長飯塚利夫を招き、筆者が司会を担当して行われた。実践発表会は「思考力、判断力、表現力を高めるために私たちは何をどのようにすればよいか」をテーマとし、その副題は、「社会科等の各教科への転移・転化を図るNIEの実践を通して」であった。当日は板倉北小の三木貴博教諭と渡辺祐希教諭の公開授業が行われ、それに引き続いてシンポジウムが行われた。

テーマは、2007年（平成19年）6月27日に改正公布された学校教育法を受けたものである。同法で新設された第30条第2項において、「これら〔習得した基礎的な知識及び技能〕を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」という努力義務が導入されたこと、及びその改正を受けた小学校学習指導要領の総則で、「これら〔習得した基礎的・基本的な知識及び技能〕を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」とされたのであった。

3年間に及んだ同校のNIE実践は、前回のシンポジウムの記録で筆者が解説したように⁽²⁾、2つの点で異彩を放つものであり、全国に知られるべき価値を持つものであったと筆者は評価している。

1つは、全校を挙げた取り組みであったことである。その点では、2007年度、2008年度の東京都北区立王子第三小学校（以下、王三小）が知られているが、前回のシンポジウム報告の解説に述べた⁽³⁾ように、板倉北小の実践はその実践が終了した時に、入れ替わるようにして出現した。その意味では、両校の取り組みは、1985年に日本に導入されたNIEの運動において、現れるべくして現れたものと言ってもよいだろう。

もう1つは、授業改善を進めるための主要な手段として新聞が活用され、かつそれを高い質で達成して見せたことである。板倉北小は前年の第2年度には、10月26日に実践の成果を発表する研究発表会を「授業改善に生きて働くNIEの実践～新聞記事を道徳に生かす学習をとおして～」というテーマで開催した。その際に開催されたシンポジウムでは、特に道徳の授業の授業改善に焦点を当てていたが、第3年度は、教科指導の改善に焦点を当てていた。

なお、その年の3月に東日本大震災があったことから、板倉北小のNIE授業では、たびたび社会科、道徳などでその関連問題が取り上げられており、その点でも知られるべき価値のあるものであったと筆者は評価している。

NIEによる「授業改善」とはどのようなことを指すのか、ということは、このシンポジウムの石田の発言に端的に表れている。石田は、授業展開において子供達の意見に中間的な立場を容認せず、公的か否定かの二者択一に子供達を追い込むべきだ、という主張を展開している。赤池はそれに対して、中間的な意見を持つこともよいのではないかと、意見を述べている。フロアから太田市立強戸中学校教諭神部秀一氏（現・東京未来大学こども心理学部准教授）が石田と同様の立場に立ち、中立の立場は言い逃れが出来、自分の考えを深めないことがあるので、無理にでもどちらかの考えかを選ばせた方がよい、ただし考えを深めた結果中間的な立場に立つこともあるだろうという意見を表明している。

その議論はNIEの教育方法の問題と教師育成の問題の両方が現れている。石田や神部氏が問題にしたのは、発達途上にある小学生が思考を深め、言論を展開できるようにするには、授業で、教師がどのように子供に向かうべきかというストラテジー（戦略）であった。そして、そこには子供達の思考力や言論力の向上だけでなく、教師の指導力、すなわち子供と向かい合って次の一手をどう打ち出すか、に関する教師の判断力を向上させる、という側面があった。そこに「授業改善」が指し示す内容の具体相が現れている。

板倉北小の実践がNIEの運動に示したことは、新聞を導入するだけでは授業の改善は図れないということであった。新聞の使用は、授業の技術によって初めて価値を持ち、授業の質が向上する。しかし、NIEにおける新聞使用には、NIE以外の授業とは異なる固有の技術が必要で、それを個々の授業を通して追求しなければならない。石田のシンポジウムにおける発言は、その部分を突いたものであり、そのことを指摘したこと自体に板倉北小の実践の質が現れているとあってよいであろう。

なお、所澤は王三小の2010年1月16日のシンポジウム「学校の壁を取り払うNIE」⁽⁴⁾、板倉北小の第2年度のシンポジウム、及びこの第3年度のシンポジウムをとおして司会を務めたが、王三小でパネリストであった赤池幹が、今回のパネリストを務めた。また第2年度のシンポジウムには、王三小でパネリストであった当時東京都北区立東十条小学校校長関口修司がパネリストとして参加し、同じくパネリストであった新聞教育支援センター代表の吉成勝好が実践全体の講評を行った。その意味では3回のシンポジウムは、同じ基調を以てNIE実践の深化を目指す

一連の内容のものであった。

なお、石田が校長として率いたNIE実践については、板倉北小のNIEが始まって2年目と終わった後の2度、NIE関係者に対して紹介する講演を行ったことも付け加えておきたい（講演記録は未発表）。

1) 所澤潤・石田成人「校長の率いるNIE活動」
関東甲信越静ブロック推進協議会において、
2010年6月26日（土）に講演。

会場）日本プレスセンタービル8階 会議室

2) 所澤潤「NIE実践指定校のあり方を考える—群馬県推進協議会長の経験を踏まえて」
東京都NIE推進協議会主催NIEセミナーにおいて、
2014年8月7日（木）に講演

会場）日本プレスセンタービル8階 会議室

本稿では、板倉北小の実践発表のうち、パネルディスカッションを収録する。肩書きはすべて当時のものである。

なお、本記録の文字化は、東京未来大学非常勤講師の佐藤久恵が行い、内容は赤池、飯塚、石田、所澤の4名で確認した。

シンポジウム

総合司会（板倉町立北小学校教頭・石川和孝） それでは、シンポジウムを始めさせていただきますと思います。はじめにパネリスト及び司会者を紹介させていただきます。まず、パネリストですが、先ほど紹介させていただきました赤池様〔シンポジウムに先立ち、来賓のところで、「日本新聞協会NIEコーディネーター赤池幹様」と紹介したことを指す〕と、邑楽郡小学校教育振興会社会科部顧問校長である中野東小学校長飯塚利夫先生。

飯塚利夫（邑楽町立中野東小学校校長） お世話になります。よろしくお願ひ致します。

総合司会 本校校長の石田成人。

石田成人（板倉町立北小学校校長） よろしくお願ひ致します。

総合司会 シンポジウムの司会進行は所澤潤先生に

お願いしたいなと思います。それでは所澤先生よろしくお願ひいたします。

所澤 潤（司会、群馬大学大学院教育学研究科教授）

それではシンポジウムを始めさせていただきます。

本日のシンポジウムは「思考力・判断力・表現力を高めるために、私たちは何をどのようにすればよいか——社会科等の各教科への転移・転化を図るNIEの実践をとおして」という題目で行いたいと思います。

はじめに、私の方からこのシンポジウムの趣旨を説明したいと考えております。このシンポジウムではNIEの推進と社会科、——それ以外の教科も含めて、少し議論を深めていきたいというふうに考えておりますが、まず、みなさん今日集まっていられるかたは、ほとんど社会科のご専門の方だと思いま

すので、思考力・判断力・表現力を高めるということについては共通理解があるのではないかというふうに思います。

それに対して、NIEについては、おそらく、まだご存知ない方も多いと思いますので、この板倉北小学校のNIEの特色ということを簡単に説明させていただきます。ここのNIEの特色は、授業改善のためのNIEということなんです。

NIEは、これまで二十何年間日本の各地で実践が重ねられておりますが、多くは、数名の実践家が学校の中で行うという形です。学校全体で行っていると自称している学校はけっこうたくさんあるわけですが、実際に学校全体で本当に行っているところというのは、それほど多いわけではありません。私の知っている限りでは、3,4年前に行っていた東京の北区立王子第三小学校、そしてこちらの板倉町立北小学校、この2校だけです。他のところは、果たして本当に学校を挙げて行っているのかというのは、実は、非常に疑問に感じています。

こちらは、全校教職員の方、皆さんがNIEを支え、NIEに取組み、そして、NIEを支えるという見事な態勢がとれておりまして、その点で非常に特色があり、そして、また、実践校としてすぐれたものであると思います。先ほど、教育長さんのお話〔シンポの前に行われた〕では、普段着でできるというNIEの方向性をおっしゃられていましたが、普段着で、簡単にできる状況をつくるためには、この板倉北小学校のように、全校を挙げて取組み、そして、みんなで、このNIEの価値を共有するという、そういう経験をした学校が存在することが必要なのではないかというふうに、私は思っております。

NIEの実践は今年3年目なのですが、実は、板倉北小学校は昨年から今年にかけて、非常に大きな変化をしています。その大きな変化というのは、——昨年は授業改善といっても、道徳の授業の授業改善というように道徳に特定していたんですね。そして、昨年こちらで開いた発表会の、その場で石田校長先生が会場に集まったみなさん方の前で、来年度は、——つまり今年ですね。今年度は、教科にNIEをお

ろしていく。道徳だけではなくて、全教科にNIEを持ちこんでいく、と、そういうようなことを宣言されて、そして、それを実現すべく、今年の実践が進んできたわけです。今日はそのうちの家庭科と、社会科の授業をみなさんに見ていただくということになりました。

全校を挙げて取り組むということは、先ほどお話ししましたが、校長先生のリーダーシップが非常に重要になります。東京の王子第三小学校も校長先生のリーダーシップが非常に強い——強いというよりも、非常に上手だったわけですね。殆ど全教員、20何人かが一斉に取り組んでいましたが、最初は渋っていた先生も1人いたそうです。

でも、その先生も次第にやる気になったと聞いています〔後にはかなり積極的に取り組むようになった〕。

しかし、こちらの板倉北小学校でも、みなさんご承知のとおり、学校の先生方全員が取り組んでいるということで、「校長が率いるNIE⁽⁶⁾」と、まさに言っている状況をこの学校で実現したということが、NIEという点で大変すばらしいものだと考えています。

ここで、今日の話に出てくることに話を向けたいと思います。NIEの、実は、非常に重要なポイントの一つが、新聞を使うということはどういうことか、という問題です。これは、全国各地で常に話題になっていることなんです、「新聞を使わなくてもいいじゃないか」というふうな意見がこちらこちらで出てきます。それに対して新聞ならではの問題があるわけです。新聞でなければできないことがあるだろう、それは、いったいどんなことなんだろうか、ということです。それも、こちらの板倉北小学校では3年間、——現在2年半になりますが、追究されてきています。こちらの先生方のそうした経験も、みなさんに語っていただきたい、——みなさんと一緒に語ろうというのが、このシンポジウムの趣旨のひとつになります。

さて、私の方で先にお話ししてしまったのですが、これから、このシンポジウムでは、こちらのパネリ

ストの皆さん、石田先生、飯塚先生、そして、赤池さんに順に、まずお話をいただきます。そして、そのあと、今日授業を行ったお二人、三木先生、渡辺先生のお二人に簡単に今日の授業について説明していただこうと思っています。そこまでの予定は決めておいて、そして、そのあとは話題になった内容に即して、三人の方々に自由に発言していただくほか、会場の方からもご意見をいただいたりしていく、という形でこのシンポジウムを進めていきたいと思っています。

それでは、まず、石田校長先生から今回の実践発表会の見所、企画した意図、その他、学校のNIEの体制その他についてお話をいただきたいと思います。

石田成人 それでは、石田ですけれども、よろしくお願ひします。先ほど所澤先生から、いろいろなお話が、経緯とかありましたけれども、去年、道徳のほうで、やらせてもらいました。

道徳でいちばんおもしろかったのは——道徳の授業というのは、子供の方を見てますと、教師の顔色が、逆に見とられているんですね、教師の方が。いい答えを言うと、先生が喜んでくれるか、それから、先生が求める答えはこうだ、こういうようなことで、子供は、いつも、先生の求める答えというのを先生の顔色をうかがいながら言っている。そういうのではなかなか、道徳的な実践力をはじめとして、子供の身につかない。そういうふうに思いました。

それから、一番道徳の中でも大切な、自分はどのように考えるのか、というのが借り物なんですね、いつも。そういうことに対して、今回、新聞というものを取り入れたことによって、自分が考えなければ答えが出ないんです。いやでも、自分はどのように考えるのかと、答えがない中で子供なりにいろいろ考えていく。そういう面が出てきました。去年の段階でそれが見えてきましたので、それをただ、道徳だけでやっていくということではなくて、いろんな教科でそれを取り入れてやっていくということは、非常に価値があるのではないかなというふうに考えまして、今年、このような企画の方をさせていただきました。

あと、付け加えると、先生方にとっては、教材研究というと、「またかい」という話になるわけです。それに対しても、この新聞というのは、非常に社会そのものでもありますし、その新聞の記事とか投稿というのは素材です。ですから、自分でこの素材に息を吹き込んでいくということをするのは、やっぱり先生方の力なんです。先生方の教材解釈の力というものが求められて、いやでも、周辺の書籍を読むとか、——簡単にいうと、好んで自分が思うまのようにいろんな教材研究ができるという、人にやらせられているつまらない教材研究ではないという、そういうよさが、かなり多くの先生方において見出されました。

そんなことを経緯として、今年度は、いろんな教科で取り組んだわけです。今日は三木先生の家庭科、そして、渡辺先生の社会科ということでやらしてもらったわけですが、とにかく、今のところは、そんな経緯で、今年公開ということにさせていただきました。私の方からは以上です。

所澤 それでは、引き続き、飯塚先生、お願いいたします。

飯塚利夫 はい、失礼いたします。邑楽町中野東小学校の飯塚でございます。今日は、郡の社会科の主任会の研究授業もありまして、主任の方が多数参加させていただいております。よろしくお願ひしたいと思います。

今、私、お話を伺って新聞を取り入れた授業、ひとつ頭に浮かんだのが、授業構想力が先生方につくのだろうかとても感じたということです。従来の指導書、教科書から抜け出て、新たに新聞というものを取り入れることで、授業を再構築していく、その力というものが本当に先生がおっしゃられたように求められている。今だから大事なのだなということをも、感じました。

さて、私は、社会科ということで今日来たものから、社会の今日の授業について、感想めいたことを申し上げたいと思います。社会科のひとつの教科特性として考えられますのは、事実認識でありますね。それから、もう一つは、意味認識という言葉



渡辺祐希教諭の授業

で言われています。今日の授業でいえば、事実認識として、県全体の地形を理解すること、そして、その地形を生かしてダムが造られた——これは事実ですね。そして、意味認識としては、ダムによる治水という点で私たちの生活が、非常によく、支えられていると。これが一つ意味になってくるかなと思います。

そうしたときに、新聞を活用した事で、標題にあるように、教科書や副読本では得られないものの見方考え方というのはどうかなという点で見ると、まず、地球に対してダム造りという事実認識、これは、立体模型がありましたね。それから地図。これで、事実認識がはかられているかなというふうに思います。その面では特に新聞でなければならないというものは、特にないな。

しかし、意味認識という点で見たときに、治水という恩恵を受けていること、教科書の副読本でもその部分の記述はあるんですけども、そのことが、一方、当事者である地域では、開発側で、今日、話がありましたですね。沼田ダムの移転、あるいは、耕地提供、生活基盤の喪失といった犠牲が伴うこともあります。教科書の中では——今使っている教科書ですけども、その土地に合わせてどんなふうに生活をしているかという、土地利用が述べられているわけで、そのメリットの面ですよ。それこそ自然の、地形を生かした生活を営み。それで生活を支

えているということです。今日の授業でいえば、そのダムという事実、そしてそれが治水という利便も受けているという事実を押さえています。そちらの部分もあるのですけれども、従来ですと、それで終わってしまっている傾向なのかなと思います。

ところが、——新聞で実際にはマイナス面、——当事者の沼田の地域は、たいへん分かりにくいマイナス面があるんですが、その部分には、一般のこれまでの授業ではスポットが当てられていないわけですから、事実認識、意味認識から「生活を支える」で、それで終わってしまう。ところが、現実の社会の中では、やはり、社会の動きの中では犠牲者を生んでいる、そういう部分があるという——八ツ場ダムもそうですね。新聞を使うと、そういう部分に子供達が目があったということで、一つは、見方考え方に、やはり、相対的に見るという目が育ってくるのかな。そういう部分では、新聞は、社会科における、今日のような授業でたいへん大きなメリットがあるのかなということをととても感じました。その意味でも、今日、適切な配慮のある授業であったかなというふうに考えます。

それから、家庭科、——よろしいでしょうか、ひと言。家庭科ですけど、この部分ではメタボの問題でありますけれども、いかに切実感を持たせるかということを行っていた。教科書では、栄養素の働きを紹介してあるんですね。そして、どんなふうに

研究されているかという、いろいろな組み合わせを考えて食べましょうという、——ここだけなんです。ところが、やはりインパクトが弱いかなとも。そこで、今日の授業でいきますと、やはり子供達に切実感、いかに切実感ということを持たせるかということが示されていたわけです。デンマークの脂肪税というのがありました。つまり、個人の問題であるはずのメタボが、今、国家というレベルの問題になってしまった。つまり、国民の健康を守るということで、脂肪税を導入せざるを得ない状況がここにあるんだということ。これは医療にもかかわってくるわけで、危機的な状況でもあることの証であるわけでありまして、そういった意味では、自分だけの問題ではなくて、これは国の問題になってしまっているんですね。こんな現状があってなんとかしなければならぬのだな。その面では非常に切迫感のあるインパクトのある授業だったと思います。家庭科の授業も、やはり新聞の今日的な問題、そのものを提示したことで、子供達にかなり今の切迫感という、インパクトのある形にかなりもっていったのかなというふうに考えております。

それから、「栄養をバランス良く」ということ、子供は、「平等に」ということがありましたけれども。同じ用途、これが見事に今日の新聞の図の富士山のような形をしたものですか、これを用いて甘いものは控えるとか、炭水化物は、野菜とか、これは多くをとる必要があると説明していたのですが、そういった理解に新聞記事が影響を持っていたのかなということで、こちらの方の授業についても、新聞活用ということに大変提言性があった授業であったかなというふうに感じています。ちょっと雑駁でございますが以上です。

所澤 続いて、赤池さんお願い致します。

赤池 幹 赤池です。授業については、今のお二人の話につきるのでしょう。私は教育者ではないので、皆さんに的確なお話ができるかどうか分かりませんが、僕の持論を述べると、先生方のいちばんの役割というのは、子供達に学ぶ意欲——もっと知りたいとか、勉強したいという学習意欲を与えることで9割

くらいは達成されているのではないかと、実は思っているんです。学習意欲のある子はやるんですよ、灘高校の伝説の教師〔橋本武氏のこと〕ではありませんけれど、できが悪い子供達に、なんとか学ぶ楽しさを伝えようとさまざまな工夫をした。その結果、屈指の進学校に導いた。新しいことを知ること、新しい価値を知るとは本当に楽しいのだということ。先生が子供達に教えてあげられれば、あとは、導くとかコーチングとかそういう証明ではないか。

実は、新しい指導要領は大きくいうとそういうことを言っているのだと僕は思うんですよ。指導要領がいう知識基盤社会というのは、スピードと変化の21世紀の教育は、新しい知識情報技術を取り入れた授業をしなくてはならない、今のような教え込み一辺倒の教育ではダメですよと言っているわけですね。そのために、教科書だけでなく多様なテキストを使って効果的な指導をして下さいと力説している。その意味について、多様なテキストとはどういうことなのか、視学官や多くの研究者、教科書会社の編集者達と話したのですが、多様なテキストの柱に新聞が取り入れられるという認識です。そういうことなんですよ。それは学ぶ意欲と大きく関係しているんですね。

それと、なぜ新聞なのかという——何か、ちょっとクラシックな問いかけがあったんですが、新聞でなくたっていいわけです。子供達が学ぶ意欲を持って一生懸命勉強しようと思えば新聞でなくてもいいんですが、では「東日本大震災」とか、「はやぶさ」とか、「なでしこジャパン」とか子供達が関心を持ってもっと知りたい、という問いかけには「他にどんなテキストがあるだろうか」と逆に問えばいいという気がするんですね。多くの指導主事の話では、「NIEで研修をやります」と呼びかけても先生はあまり集まらない。「新聞を使った授業の研究会をします」というと集まる。こういう、なんというか食わず嫌いかアレルギーというか、まだ若干誤解が教育界の皆さんにあるのかなという感じがしますので、私達もこれからの自分の課題でもあると思います。

最後になりますけど、先週はさいたま市の教育委



三木貴博教諭の授業

員会で、市の全校、——164校ですが、先生が集まって研修がありました。さいたま市は全市挙げてNIEに取り組むということを宣言して、取り組んでいます。これはNIEの教育効果をかなり分析した結果です。

先月、鳥取県の教育委員会に行き、来週は長崎県なんです。いろんなところから「新聞を使った授業ってなんだ」という問いかけがいっぱいなされています。こちら [板倉北小] の学校の取組みというのは、全く先進的ですね。うれしい限りというか、石田先生のご努力、先生方のご理解があって、こんな授業が全国で行われたらというふうに思っています。今日の事例も全国に発信していきたいと思えます。

所澤 それでは、ひきつづき、授業者の三木先生と渡辺先生に3分間くらいずつで、今日の授業についてどのようなことを狙っていて、そして、どこでうまくいき、どこで失敗したというふうに考えているかというようなことをお話いただければというふうに思います。

三木貴博（板倉町立北小学校5学年担任） 今日はお世話になりました。家庭科の授業を行いました三木と申します。よろしくお願いいたします。

クラスの12人の子供の実態ですが、『東京新聞』さんのメタボの定義をもとにして、子供のへそまわりと身長を測定して比べた結果、クラスで12人のう

ちの7人が「メタボ」ということが分かりました。給食の食べ具合を見てみましても、カレーが出た時には飲み込むと。担任の私の給食ですら大盛りにはできないというクラスの実態から見て、これはなんとかしなければということで、家庭科の教科書では全く書いていないことを取り上げました。飯塚校長先生がおっしゃったように家庭科の教科書には「バランス良く食べましょう」「いろいろなものを組み合わせて食べましょう」それしか載っていません。そこで、『東京新聞』さんのメタボの子供が食べる量の目安・栄養素のピラミッド図を軸に子供達と話し合いを重ねてきました。

新聞はタイムリーなネタがリアルタイムで、今まさに、世界や日本で起こっていることが載っております。子供の中でメタボが広がっている現状、それから、諸外国ではカロリーが高い食品に税金をかけるという現状、そういったものを子供達に考えさせたいということを思いついたからです。特に、小学校の高学年で肥満が非常に広がっているということも新聞に書いてありまして、一刻も早くクラスの子供達に思いを伝えるチャンスだと考えて、こいうふうな形で、発表会の機会に家庭科を実施しました。

次に、今日用いた新聞の記事です。もちろん私も普段から新聞を読んでおります。時間にしてでも30分程度です。でも、今日用いた新聞の記事は私が見つけたものではありません。本校の6年生が作成し

た新聞スクラップが廊下に貼り出されていて、たまたま目に入っただけのものです。これも石田校長をはじめとした全校規模で行っていることから、授業で使える新聞を見つけることができたと思っています。また、他に使った新聞も私がみつけたものではありません。朝のラジオですね——「森本毅郎スタンバイ」で遠藤泰子さんがハンガリーで、脂肪税を導入したという新聞記事から引用したニュースを聞いて見つけたものです。ですので、容易に新聞記事というのは見付き、活用できるのだな、というふうな提言で話を締めさせていただきます。本日はありがとうございました。

所澤 では、ひき続き渡辺先生お願いします。

渡辺祐希（板倉町立北小学校4学年担任） 本日はどうもありがとうございました。社会の授業をさせていただきました渡辺です。よろしくをお願いします。本校の4年生は1学期に尾瀬学校で尾瀬に行っております。時を同じくして、ちょうど新聞の方で「東京電力が尾瀬を売る」という新聞がありまして、子供がそれを切ってきました。尾瀬と東京電力とどうい関係があるのだろうというところからさかのぼると、そんなきっかけで今日の授業に至っているんですけども、なぜ「ダムなのか」と唐突に思われた方もいらっしゃるくらい唐突だったのですが、実はそういう背景があります。

それなので、子供の方からも「ダムの役割」と言ったときに、最初に水力発電というのが出て来たものですから、そんな経緯で出て来たのかなというふうに思います。普段着のNIEということなんですけれども、はじめてご覧になった方は、板倉北小が毎日こういう授業をしているのかというふうにご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、そんなことは実はなくて、校長先生の前であまり言えないですけども、普段通りの授業ももちろんしていますが、さっき、三木の方も申し上げているとおり、普段から子供達が新聞を読む環境があります。これは、授業とは違うところであるんです。ですから、今日のように授業の中で新聞をつかう——教師が使うことに対して子供達の抵抗というのは、少ないのでは

ないかというふうに考えています。

それから、新聞を使うよさ、新聞でなくてはいけない理由というところに言及するのであればですね、それは全国大会に参加させていただいたときに、どなたかがおっしゃっていたのですが、今は答えのない時代であると。答えのない時代を生きている子供達だからこそ、何がいちばんいいのかということを考えるために、新聞がうまく使えるのではないかということだったのですけれど。そうだなというふうに私自身は基本的に思っているんですけども、答えがないからこそ、どうなっていくべきなのだろうかというところを考える楽しさが出てくる。また、興味が出てくる、そういう部分を少し授業で教えることに繋げることができたら、それがいちばんNIEのいいところだと、——学校教育と新聞が繋がる一番のメリットなのではないかなというふうに思いました。以上です、どうもありがとうございます。

所澤 ありがとうございます。ちょっと、お二人に追加して質問したいのですが、「答えのない時代に新聞が使える」ということで、NIEは非常に有効であるというお話なのですが、確かに、「八ツ場ダム」についても答えが出ていないし、それから、「脂肪税その他、メタボに関する税金」についても答えが出ていない問題だろうというふうに思うんですね。その問題が非常に大きな問題だということ子供に理解させるのが一つの授業の技というふうにも考えられるわけですが、この授業を構想するにあたって、多分、一人ではなく校長先生とそれから、教務主任の先生、その他何人かの方といろいろ相談をされたと思うんですが、お二人はどのような助言を受けて、今日のような授業を実現されているのでしょうか。

三木 まず、現実には起こっている肥満対策の記事を子供達に提示したいと校長先生に伝えると、読み比べられる他の新聞社の記事を校長先生からたくさん頂きました。また、5年生は税金の意味が分からないので、きちんと伝えること。さらにその税金は海外の出来事であるけど、いずれ自分の身にかかってくるかもしれない現実問題だ、というインパクトを与えるように言われました。

所澤 校長先生と授業の内容についてだいぶそういう相談をされたのですか？

三木 はい。そうですね。あとは、子供の意見をうまく引き出して、取り上げていったほうがよいと。子供の意見に対して教師がどう切り返していくか。私と子供とのやりとりを意識して授業をしていくようアドバイスされました。

所澤 わかりました。渡辺先生、いかがですか？

渡辺 はい、うちの方は、学校が小さいものだから、職員室内の風通りもよくて「こんな授業をやらうと思っているんです」なんて机の反対側の先生に、話した途端に周りの人も聞いていて、じゃあなんて、今回も色んな意見をもらったのですが、私がもらった中で私の観点の中で、少し抜けていたなあと思ったのは、群馬県の土地を考える上で、ダムを通して考えるときに、「ああそうか」、子供が「だから群馬っていいところなんだ」とか、「群馬の土地ってこういうふうを活用するとすごく人のためになるのだ」とか、「こんないい環境ができる」とか、そのように少し群馬に対して誇りに思えるような、——そんなふうにもっていけば、「さらに、よくするにはどうしたらいいのだろう」ともっていきのにやりやすいのではないかということを言われたりとか。最終的にどうなるかわからないけれど、群馬をつくっているのは子供達自身なのだということを子供に返してあげた方がいいなんていうことのアドバイスももらったりして、そういうアドバイスがとてもたいへん役に立ちましたね。

所澤 どうもありがとうございました。今のお二人の答えに対して、石田先生、逆に指導をしていたとか、一緒に考えた立場としていかがでございましょうか。

石田 私は特に、両方の教科等に関して、ハッとする導入というのが前々から言われていましたので。例えば三木先生の方では200キロ超の、そういう動けなくなってしまったような人の姿を出した方がいいのではないかとか、私はいつもそういうことで、——アジテートするといいますか、お二方がまじめに、まじめにやってくれたところを、もう少し、一

—なんていいですかね、子供達がアイスブレイキングをしすぎるぐらいにやってもいいのではないかと。導入のところなどは、そんなようなことをいろいろお話しました。

あとは、いつもやっていることなんですけれど、やはり授業者は自分でやりたいというのが、必ずその中にあるわけですから、その趣旨を根底から覆すようなそういうような、一緒に考えるという方針でやっていますので、それはないように自分の方はとりあえず、やってきたようなつもりでおります。以上です。

所澤 さて、インパクトという点でいうと、今の授業のはじまりのところも非常に面白いというふうに感じたのですが、二人の授業を見てみると、実はけっこう違う部分がNIEの観点でもあるのではないかといいふうに感じました。渡辺先生の場合は授業をする前にダムだとか、関連のことについていろいろ事前学習をして、しかし、今日の部分については全く子供達に悟られないようにしているというふうに感じたんですね。例えば、「沼田ダム」のことは絶対子供達にはわからないようにして、今日の授業を計画されているというふうに感じました。

三木先生の授業は、渡辺先生のように事前に周到的な準備をしていくというよりも、今日の一時間の中に、どれだけのものを入れられるかという形で授業をされているように感じたのですが三木先生いかがでしょうか、その点。

三木 そのために、授業では分からないことは教えました。例えば「税金」だとか、それぞれ栄養素の「カロリー」ですとか、太っていて悪いこと、太っていると何もいいことがないこと、病気面、それから、持病について。何も知識がないまっさらな子供に、自然に考えさせたいなと思いました。

所澤 だいたい、そうですね。ですから一回の授業ですべて語ろうとしているような感じでしょうか？

三木 そうですね。一時間の授業で考えさせようと。実はこの授業のすぐ前は、ご飯と味噌汁の調理実習をしていて、それを受けて栄養素を考える授業計画だったんです。もう少し、事前の積み重ねがあった

ほうがよかったかも知れませんね。

所澤 なんか、渡辺先生の場合だと、あらかじめ何回かの授業でだんだん積み上げていって最後に議論するというか、論点をみつけていくというような印象を受けたのですね、私は。ありがとうございます。

その点について、飯塚先生、先ほど、「事実認識」と「意味認識」という考え方をご紹介されていましたが、今のお二人の授業の違いですね。これについては何かお感じになったことはありますか。

飯塚 三木先生の先ほどの授業構成にあたって、現実起こっている問題というふうなものと、子供の意見を引き出すという話がありました。現実起こっている問題ということで、かなり今日はインパクトがあるなということを感じました。——新聞記事がですね。

それから、子供に判断を求める場面がありましたね。大方の子供達が中間というような話がありました。ただ、最初、子供達が中間という意見があまりないのかな？ というふうに思ったんですけど、私がよく聞いてみると、そうではなくて、中間でも例えば今日、特に物価の値段が上がって来ているとか、それから、家庭の調理に使うものが大問題だということ。そんなことをお話してくれた子がいます。あそこは子供の論理で考えてちゃんとできているのだなということをととても感じました。そういう面で、私は子供達のその実感と言うのは個々の子供達が自分なりにその現実から、是か非かということではなくて、一生懸命今日的な問題を受け止めて考えているのかなということをと、とても強く感じましたね。そういう意味ではやはり、中間というのはニュートラルというようなことであって、あれもこれも三木先生が、一つの新聞という素材を与えて、そしてうまく引き出したかなということを感じます。そういう意味ではよかったかなというふうに考えております。

それから、渡辺先生の方の問題ですけれども、最後に八ツ場ダムという話がありました。(所澤 はい。)結論は、これはわかりません。ただ、今日の授業の中でやはり、赤池さんから先ほどお話がありました「学ぶ意欲を持たせること」が大事だということ。そ

ういう課題意識——自ら考える力。主体的に学び続けることで、子供達は他人から自分のことというふうに少しシフトしているかなとそんなふうに感じました。やはり、それも新聞の大きな効用かなと、とても感じました。これは、続けていくということが子供の社会を見る目へとつながっていくのだろうと思うのですけれども、ぐっと感じました。以上でございます。

所澤 赤池さん、ちょうど赤池さんのお名前出てきましたが、赤池さん、先ほど「子供に学ぶ意欲を持たせる」ということをおっしゃっていましたが、特に今日の渡辺先生の授業は社会認識の問題として新聞記事を書く側からも非常に面白い問題提起があったように思うのですけれどもいかがでしたでしょうか。

赤池 お二人の先生の授業を拝見して、簡単に言う——先ほど飯塚先生がおっしゃったんですが、大きな目で見るとシチズンシップなんですよ。社会に参画する、自分が個人としてどういうふうに社会に関わっていくかという授業も僕はあると思うんですよ、メタボの問題にしても、八ツ場ダムの問題にしても。

要するに、今までの教育——国語を例にとれば、文学作品中心だったですよ。自分の内面の深化だとか、作品の理解とか、人物の把握だとか、作者の意図とかを追っていくという授業が進められてきたかと思うのですが、今度、新聞がそこに入った。特に、国語を中心にすべての教科で言語活動を活発にしろという意味は、内面の深化だけでは言語活動とかコミュニケーションとか、表現とかはなかなか活発化しないということなんです。そこに、公の視点、社会を導入するという明確な意思ですよ。社会的存在としての個人という、それがないと言語活動は成り立ち難いし、教科書が提示する均質の価値の中では言語活動が図れるわけではないんです。多様性があって、いろんな価値があって、それを認め合うということが前提でないと言語活動なんてあり得ない。答えがないテーマの中で、多様性を認め合う、それが今の教育に求められる大きな課題なのだと思います。

多様性の認知は自己肯定観につながるんです。自分の言っていることを先生が聞いてくれる。友達が聞いてくれる。ある一定の回答がある、そこからはみ出すとすれば悪だ、間違いだというような教育の中では、自己肯定観は生まれてきません。いちばんの日本の教育の問題は、PISAで言えば、約3割の子供達が学校教育についていけないというような実態がある。それはものすごく大きな問題で、学習意欲や自己肯定観の欠如と関連している。それは、学習の素材と大きく関係するだろうと僕は思っています。

そういう意味で教師が、今を教育の中に取り入れながら、子供達に問いかけをする。そこにあえて結論を——これはこうだ、ああだとか、結論を持ちこまない教育というのは、多分これからあり得るだろうと。そうなっていくだろうと考えます。教え込み教育から考える教育への脱皮です。

そういうふう感じているのは、国際機関で日本人を登用しようという意欲がなくなっている。国連にしろ、いろんな国際機関は日本の教育をよく見ているんですね。日本の若者達は、マニュアルがあればそれをうまくこなす点ですぐれているけど、提案力、企画力があまりにもない。それとコミュニケーションと説得力。人材もまた国際化の時代に入っている以上、そういう教育がぜひとも必要になってくるだろうと思う。そうならなければならないだろうと僕は思います。今日行われたような教育の積み重ねがたぶん、国際的に通用する人材をつくっているのだろうと思います。以上です。

所澤 今、石田先生から手が上がりましたので、石田先生お願いいたします。

石田 これはフロアの方に振っていただきたいことの一つなんですけど、今、お二方のパネラーの方が言ったことにも関連するわけですけど、私が三木先生の授業をみていたときに気に入らないですね。何が気に入らないかという中間の立場、そういうことを最初から容認したということが、これはどうなのかなというふうに思いました。やはり、せっかく新聞を取り入れてやっているわけで、今日の場合など

もその賛成、そして反対というそういう立場で最初は立たせて、そして、そのところで自分はどうかと考えながら、そして自分は賛成、そして自分は反対、そしてその次に、どうしても折り合いがつかなくて、中間的な意見が出てくるというのは、これは必然性があるって子供は考えた末のことだと思うのだけれど、はじめから何か中間がいいというのは、どうなのだろう。

私は本校に着任したときに、つくづく思ったことは、いたれりつくせり、そういうような様子でした。今日も、中間をおいて、そして子供達に、体裁のいいようなそういう回答をしていく逃げ道を与えたように感じました。あんまりこれはいい方法ではないのではないかと。

終わりのところでどうしてもという形でないと、——自分はどう考えるかという点では、そういうものでないと。中間が出てくるのでは、新聞のもつよさというのを見出すためには不完全燃焼になるのではないかなと。当然子供達は、体裁のいいことに、どんどんどんどん付和雷同していきますから。そして「〇〇さんと同じ」そういうことになると、本当に話し合いの、ある意味での深化、深まりであるとか、進展につながるのかどうかというのは非常に疑問に思っております。フロアの方をお願いします。

所澤 はい。この点についてご意見をいただきたいと思うのですが、ちょっと最初に私の方から1人指名させていただいていいでしょうか。今年度から実践することになった強戸(ごうど)中学校の神部先生、今の是非かという部分ですね。神部先生は国語の先生でディベートなどもだいぶ経験されているので、お感じのことをおっしゃっていただけるとありがたいなと思います。

神部秀一(太田市立強戸中学校教諭) 今のお話に関しては、石田校長先生のおっしゃるとおりだと思います。私もディベートとかパネルとかやりますが、A・Bの2択でなく、A・B・Cの3択で、Bを中間とすると、Bの中間はいいとこ取りができて、楽なのです。結局深く考えずに終わってしまう。そういうことがあるんですね。ですから、中間を設定しな

いで、どちらかを選ばせるという方が、悩んだり考えたりするので、いいと考えています。ただ、ですね。「思考力、判断力、表現力」といったときにやっぱり最終的には表現なんです。自分自身の表現をさせることが大事だと思います。理由がきちんと言えること、——中間でも。要するに立場に立たせて、表現をさせることが一番大事なことです。そういうふうに思っています。今日の子は中間の立場でも自分の表現で言っていましたよね。言っていたから、私はまあいいかなというふうに思いました。以上です？

所澤 なるほど。今の中間でも言ったからいいかなというのは、先ほどの飯塚先生のおっしゃったことと近いと思うんですが、今日フロアに来てらっしゃる社会科部会の板倉南小学校の村田憲一先生いらっしゃいますか？ よろしいでしょうか、今の点についてお感じのことがあったらおっしゃっていただけるとありがたいです。

村田憲一（板倉町立南小学校） A, B, C、——中間があると、ものによっては中間というのは、大切になってくるかとも思うんですけれども、やはり最初は子供達に賛成か反対かというような立場に立って考えさせて友達の意見とか考えを、吸収することによって自分の意見、考えがほんとにいいのかな、あるいはちょっと考え直した方がいいかなというような、こういう思考力というんですか、——判断をして、また新しい考えを生みだして行くという点ではそういうふうにしたほうがいいかなと思うんですけれども。

所澤 ありがとうございます。ちょっとあとでまた、ご意見を伺いたいことがあるのですが、渡辺先生の方でも実は三つに分けたんですね。賛成の人と反対の人とわからない人、というふうにやはり三つに分けたのですが、渡辺先生の授業の方はそのときにちょうどだいたい生徒が子供の三分の一ずつくらいに分かれたと思います。渡辺先生がそこで三つに分ける発問をした理由はなんだったのでしょうか。

渡辺 そうですね、全体的に聞くと1人1人に聞くよりも、1人1人が全員が考えるということになると思ったので、あの時点で結論を決めさせる必要はな

いと思ったので、中間意見を容認したのですけれども。

所澤 中間意見は確か沼田ダムでしたっけ、沼田ダムをつくるかつくらないかで「賛成するか」「反対するか」それとも「わからない」というふうな言い方をさせるということだったですね。（渡辺 はい。）三つに分けることによってはっきり意見がでるというふう感じたのでしょうか。

渡辺 本当は、二つに分けたかったのですが手の挙げ方を見て、これは難しくてすぐに考えが決まらない子がいるだろうなと思ったので、その子達も手を挙げる機会を与えたという程度で、特に容認しようと思って中間をつくったわけではないのですけれども結果的にはそうなってしまいました。

所澤 今、三木先生のところで校長先生からご意見が出ていますが、三木先生の場合は中間になった子が多かったですね、非常に。二つの立場に分かれた子はそれほど多くなかったのですが、授業のその部分では、計画して考えてそういうふうに三つに分けたのだと思うのですが、実際に子供の意見を聞いて授業の中で先生はどのようなふう感じられましたか？

三木 確かに、中間の子はいたんですが、反対の子が多かったのかなと授業をして思いました。ただ、どの立場を選んでもよいけど、根拠をはっきりと話させたかったです。本当は賛成だけど、自分がカロリーの高いものを料理に使うからとか、自分もカロリーの高いものを飲むから反対かなとか。まだ5年生は新聞をうまく読み取れないから分からなかったかな？ 税金というのが分かっていないのかな？

集めたお金の使い道とか、目的とかについて、理解できない子供がいたのかなと感じました。そのために、なかなか根拠を引き出せなかったと思います。中間の立場であってもいいと思いましたが、根拠まで言わせることがうまくできなかったと思います。

所澤 どうもありがとうございます。石田先生・・・、どうぞ、赤池さんどうぞ。

赤池 是非、言いたいのですけれども思考力、判断力、表現力とすらっといいますが、社会で起きているいろんなことというのは、考えれば考えるほどわ

からない、そういうことがいっぱいあり、むしろ、その方が多いわけなんです。そこで無理に賛否というのはですね、僕はあまり賛成しない。一生懸命考えたけれどわからない、そのわからないことを言葉として表現させてあげた方がいいと思う。ハツ場（やんば）ダムをどうするかとか、税金に賛成か反対かとか。そんな単純なものじゃないでしょう。

所澤 はい、どうぞ。

飯塚 私は、AかBかと、答えもあるときは出すことも必要だと思うのですが、先ほどの認めようという話がありましたけれども、根拠を出して話し合うというのは、お互いに意見を出すのではなくて、互いに影響し合うことが大事なことなのかなと。やはり自分がどっちの考えにつくかはなかなか難しい。でも、Aちゃんの意見、Bちゃんの意見を聞いているうちに、自分の考えがより新たな気づきになったりとか、そういうもので判断うんぬんという部分も時には必要かもしれないですけど、誰でもとやっぱり話し合う、影響しあいながら自分の考えをより広めていくかというようなことがとても大事なことなのかなということを感じています。

所澤 なるほど。神部先生、ちょっともう一度先生に言っていただきたいと思うのですが。やはり、イエス・ノーをはっきりさせた方がいいのではないかという、一つの教育上の考え方ってあると思うのです。今、赤池さんのお話は何か、できあがったある程度知的に完成された大人がものを考えるときの考え方かなという感じがして、未完成な小学生・中学生に大人と同じような思考をさせて大丈夫だろうかということを、私、今、感じたので、神部先生、先ほどのことをちょっと発展させてお願いします。

神部 やはり、思考、判断、表現というのは、最終的には表現力だと思うんですね。表現力をどう鍛えるか、という方向で考えています。たとえば、こういう風に自分の考えを人前で話す。情報を集めて、整理して、人にわかるように伝えていく。という、そういう力をつけてやるのが大事だと思うんですね。そうすると、まず、立場に立たせる。AかBか、賛成か反対か、判断させる。これはすごく大事なこ

とだと思っんです。立場に立った時、はじめて人は考えるんです。それまでは傍観者です。立場に立ったときにはじめて思考します。当事者になるんです。判断をさせ思考をさせる。判断と思考とはどちらが先でもいいんです。思考して判断し立場を選ぶ。判断をして立場に立たせて思考させる、というのもいいと思いますけれども。そういうことを訓練する必要があると思っんです。

ですから、石田校長先生がおっしゃるのは、そういう立場に追い込まなければだめだということだと思います。追い込んで自分で考えるようにさせなければだめだということなんですね。判断させるのは、思考を促す手段です。最終的にはやっぱり表現力。自分の言葉で自分の意見を表現できるようにしなければいけないだろう。そういう訓練が必要なのではないか。特に小学校・中学校では。そういうことをおっしゃりたかったんだと思いますし、私はそういうふうに思っています。

所澤 どうもありがとうございました。はい、どうぞ石田先生。

石田 赤池先生がおっしゃったことはよくわかります。私が言っているのは、なんといいですか、具体的な子供の事実に即して見てもらいたいのですよ。

今日、家庭科の中の参観をしている人、この中にかなりいると思うのですがけれど、あのときに、最初に発言をした猿山くんという非常に利発な子供がいて、その子供が中間的な発表をしたわけです。そして、次に言った子は、それに追随するような形で、本当に付和雷同的ですよ。一生懸命考えたすえに、出たことではなくて、猿山くんがそういうふうに模範解答してくれたから、自分も中間につこうという、誰がどういうふうに見ても、そういう付和雷同的なところですよ。次に言った子に、そういうものが見えたので、そういう子供の具体的な事実から見たときに、私はあえてお話ししたことです。

赤池先生、私がさっき言ったように一生懸命考えることができたかどうかということについて、——そのへんも非常に危惧をしているし、付和雷同的な部分がうんと見えてきたんじゃないかなとそういう

事象を具体的に見た中で、言っているレベルの話です。

所澤 石田先生と神部先生のは戦略的ですね、——子供に対してどういう戦略を立てて向かっていくかというような視点があると思います。それではですね、この話は、ちょっとここで切りたいと思います。

もう一つですね、NIEの価値ということで、今日の授業を見ながら私が感じたことが一つありまして、その点についてちょっとみなさんに注意を喚起したいと思います。特にお二人の授業でもそうなんですけれども、人間とはものを考えるときにどうやって情報を得ていくのだろうということなんです。たいいてい、今の学校の授業は教科書があって先生が配った資料というのがあって、そして、それによって授業が組立てられていって、その情報の根っこはどこにあるのかよくわからない。

例えば歴史の教科書って色んなことが書いてあるんですが、それは、誰かの書いた歴史の本に書いてあって、その誰かの書いた歴史の本は、また何か別の歴史の本があるのだろうというような形で、どこまで情報源がさかのぼれるかわからないということが多いと思うんです。そういう中で、今日の二人の授業は例えば、脂肪税であれば、新聞から見つけた情報ですよ、——ラジオで聞いたとお話していましたけれども。新聞で見つかる情報です。それから、渡辺先生の沼田ダムの話も新聞に載っている情報なので同じなんです。今日実は、沼田ダムについて新聞に載っているんです。ただ渡辺先生が見つけた新聞記事は紹介しなかったんですね。わかった結果だけを紹介していたと思うんですが、——ですよ？ それがちょっと惜しいなと思ったのですが、実はああいう情報も知っている人から聞いて集めているわけではなくて、基本的には新聞から拾っていく。

ああいう新聞から情報を拾っていくという営みというのですかね、そういうことができるようになるって非常に重要なことなんじゃないかなと。つまり、自分でいろいろ情報源を探っていくということは、子供が社会認識を育てていくうえで非常に重要で、

NIEの授業がそれを実現している場になっているのではないかなということを感じて授業を見ていました。その点について、社会科部会の村田先生か、あるいは他の方でもよろしいんですが、何か言っていただけるとありがたいなというふうに思っています。いかがでしょうか。要するに子供の情報源を——情報を探して行く技能をどのようにして育てていくかという問題です。

村田 社会について申し上げるとすればすぐれた資料がやはり、授業を組み立てる上で大事なのかなというふうに思います。その資料というのは、新聞にしる、何にしる客観化していくものが必要なのかなというふうに思うんですね。その資料を元にして子供達はその原因やその結果、それから、見えない糸でつながっていくような、歴史で言えば歴史の流れみたいな、そういったものを考えて調べていくというような形になっていくのかなというふうに思うんです。

だから、資料の関係ですと、価値がどのくらいあるかというのが大事なことかなというふうに思います。

所澤 その資料の価値がどのくらいあるかというのを判断する場所はどこだと考えていらっしゃいますか？

村田 これはですね、最終的には自分の判断になるのかなと思うんですけれども、やはり端的に言ってこれは使える資料だなと判断するようになると思います。

所澤 つまり先生が資料の価値をどのように判断するかというのは非常に重要なことですよ。私は教師の専門性とはそういうところにもあるかなというふうに思うんですが、よい——価値のある情報を記事の中に見つけてそれを拾っていくという経験を積み重ねていくことによって、子供の社会認識の能力も高まっていくのではないかなということも感じていたんですが。そのような理解でよろしいのでしょうか。

村田 子供にしてみれば、新聞の内容については子供だけで判断できるものとそうでないものとあります

よね。だから例えば、子供新聞とかそういった、子供向けのものに対して子供がどう判断するかというのは何かというふうに思います。

所澤 どうもありがとうございます。今のような点について、ちょっとすいません。明治学院大学の下田先生がいらっしゃっていますので、今、NIEの、新聞ならではのNIEということについて議論をしている部分があるのですが、新聞記事から子供が情報を拾っていくという、子供の活動ですね、それをだいたいNIEを御専門にされている先生方どのように考えていらっしゃるかなど。

下田好行（明治学院大学） 答えになるかはわからないのですが、シンポジウムの先生方の話を聞いて、やっぱり、私は多様性を認めるということが大事で、人間というのは、個人の人間ではなくて、人があって個人を意識することになるのだから、自分とは違った考えの人の多様性というのをまずみつけると、それで、それがすぐにイエスかノーかという答えはまだ早急に答えを出す必要性はまだないのではないかと。自分の意識の中に、それを秘めておいて、人生の中で答えを出していけばいいかなくらいに思っているんですけども、そういう意味で、インターネットなんかは自分の好きなおところだけつまみ食いするとやっぱりそれは、やっぱり自分の対極である人の存在を見ることによって、自分は自分を意識することになるので、そういう観点で、今聞いたときにそういうのが必要だなと。

多様性を見せると、——新聞で。だから自分の好きなものだけではなくて、自分の好きじゃないものも見ると。それは新聞だといろいろなことが載っているので、カスタマイズ——自分が好きなものだけ、つまみ食いするのではなくて、色んなところを見てそれで人間がわかるのではないかと。そういうふうに今思いました。

所澤 なるほど。非常に新聞のアナログ的な機能を、評価して言っていたらと思うのですが、インターネット上で検索エンジンでパッとかけると、確かに新聞記事いっぱい出てくるんですが、自分が思っていた期待した答えしか出てこないのですね。

それ以外のものはみつからない。

しかし、現実には社会認識をするときには、自分が期待していないものがどんどん頭の中に入っていると社会を知っていくことはできないと思うんですね。例えば、沼田ダムもたまたま今朝、新聞記事の中に出ていたから、渡辺先生は今日の授業で取り入れることができた、というようなところがあると思うんですね。そういう点で、新聞は、先生方にとっても新しい情報、的確な情報を見るための一つの場であるわけですが、先生がそういうことを経験しているということは、それは子供達にもそれが伝わるということではないかなということを感じています。

石田先生、NIE、——新聞ならではの授業ということではいかがですか、今のポイントは。

石田 私は、冒頭に申し上げたように、教材研究というふうに言うと非常に、先生方が時間がかかる手間がかかる、暇がかかる、そして自分のやりたくないこと、そういうことについてもやらなければいけないという、そういうやらせられているという感覚があるわけなんですけれども、やはり、新聞の場合には、本当に先生方が自分で記事を探して、興味を持っているわけです。関心も自分で持っていることですので、そういう意味でも今の話と符合する面が出てくると思います。先生方はやはり、あんまり負荷、——そういうものを感じることなく、自分で思い描くような、何よりもだれしもやったことがない授業が一個一個創出されていく。そのことが非常に魅力ですよ、先生方にとって。そんな意味で、私も今の問いについての回答を考えています。以上です。

所澤 それでは残り時間もそんなにないので、少しフロアの他の方にも伺いたいと思うのですが、北小学校の職員でいらっしゃいます杉戸先生。本年で3年目なんですけど、杉戸先生、2年目からNIEの授業に取り組んでいらっしゃいます。実際にNIEに取り組んでみて、杉戸先生、——英語がご専門なんですけど、実際に取り組んでみてNIEの魅力ってどんなところに感じていらっしゃるのでしょうか。ちょっとそういう点をお話いただければというふうに思います。

杉戸敬治（板倉町立北小学校4学年担任） NIEということですが、新聞記事というのはほんとうに、客観的な事実を述べたものであるし、また、それについて意見を述べたものが活字としてあるわけですが、それを授業に生かしていくということになると、それを見た人がどういうふうに切っていくのかという、その切り口が非常に大事になってくるのかなということを非常に感じております。

例えば同じ記事であってもAという人、Bという人、全然違う切り口になると思うんですね。子供の実態が違えばさらにこれが違ってくるということで、非常に多様な活用ができる、そのようないい利点があるのかなというふうに感じています。以上です。

所澤 一つの情報の子供の特性に合わせていろいろな形で利用していくことができるというようなことでしょうか。それでは、あと何人かの方に伺いたいと思うのですが、今日は小菅さんいらっしゃるでしょうか。読売センター藤岡店の小菅さんですが、お帰りになってしまいましたか。それではですね、もう1人、北小学校の職員の阿部先生、今年、先生は理科のご専門ですが、去年は道徳だったんですが、今年、先生は理科の授業で取り組むという形でNIEに取り組まれて、どのようなことを感じていらっしゃるかお話しただけるとありがたいです。

阿部恵光（板倉町立北小学校教務主任） すいません、こういう格好ですいません。[校外学習からもどってきたところで軽装] 理科でですか？ そうですね、NIEを理科でやるというのは、今のところそれほどではないのですが、ただ、新聞の記事が新聞社によっていろいろニュアンスが変わってきますよね。その辺を例えば感じさせたりというのも一つのあり方かなと。さっき、先生がおっしゃった、——インターネットで一方的に出てくるものの中でも、やはりニュアンスが少し違う、——それを複数のものから自分達で自分のあったものをチョイスするみたいな形のものというの、あっていいなと。その場合、また新聞をいっぱい読むというの、必要になってくるということで、そんな感じを、今感じてます。

所澤 どうもありがとうございます。北小学校の評

議員をされている——学校評議員をされている大野美由紀さんいらっしゃるでしょうか。大野さんから今日の授業、普段の学校の様子なども含めて、NIEに取り組んできた北小学校について感じていらっしゃることをお話いただければありがたいです。

大野美由紀（板倉町立北小学校評議員） 失礼いたします。三木先生、渡辺先生今日はどうもありがとうございました。特に体格のいい5年生では自分のこととして考えられる非常に親しみやすい授業で、渡辺先生の社会科は、群馬に住みながら、あれだけダムをピンスポットで掘り下げた授業をはじめ拝見しました。たいへん勉強になりました。

私は9年間の英語ボランティアで北小学校に子供と関わらせていただいているのです。ここ3年前から一丸となったNIEの活動に取り組んでくださっているのですが、去年くらいから子供がすごく変わって来たなと思って、例えば、人の顔を見て話す。大きな声で話す。それから、人と違った考えでも堂々と言う——先ほど、校長先生から中間を認めるのはちょっとというお話があったのですが、あのときも中間が多い中で——茜音（あかね）ちゃんだったかな、1人だけ反対と言って手を挙げた子供がいたんですね。渡辺先生の授業のときも「ダムはもういいのではないか」という意見が多い中で、柊雅（しゅうが）だけが1人反対と言ったんですね。そういうのってすごく大事なことだなと思って、新聞によるタイムリーな膨大な情報を入れていただくことによって、洗練されたというか、たくましい人間になってきたのかなと思います。この小さな小学校に子供を通わせる親としてはすごく有難いことで、今後ともNIEの活動に長く続けていただけたらと思います。以上です。

所澤 どうもありがとうございました。あと、新聞社の方——ほんとに時間がないのですが、ひと言上毛新聞から内山さんですか、お願いいたします。今日のNIEの様子をご覧になっていかがでしたでしょうか。

内山充（上毛新聞社） 新聞をつかって授業をしていただきましてありがとうございます。今、新聞が

読まれなくなってきたということもありまして、子供達が、若年層の新聞ばなれもありまして、そういうこともあって、これは新聞の販売戦略上ということもあります。新聞を読んでいただきたいということもあります。ただ、今日の授業を聞いていて、私も非常に勉強になりました。

私——新聞社の編集局長という立場からは離れて言わせていただくと、どちらかという私は、デイベートというのは好きではなくて、そういう世界で生きてこなかったです。新聞社の記事をつかってイエスカノーかというのをやっても、全然そんなことはなくて、話しているときはしゃべりがうまいのはたいていよくしゃべるのですね。それでは、「お前、原稿を書いてみる」と言われたときに、原稿に向かったときに「1行も書けないということはいくつもあります。『八ッ場ダム』の話もあります。どっちははっきりして書いてみると言われても、なかなかこれ、地方紙の立場では言えないし、カメラ、録音もあって考えられないことばかりです。考えられるのだけれど結論をなかなか言えない。言うときは命がけで言わなければならぬところがあるので、そういうことが日本人の社会ってなかなか、イエスカノーを言わない社会なのだと思うんですね。

それが、選挙制度が今、小選挙区制になってイエスカノーの世界になって。今またそれもちょっとたいへんな政治になっちゃったねということで、また中選挙区の真ん中があるようなところがいいのではないかとということもまた出てますよね。そういうことで、なかなか二者択一が難しいと思いつつ、子供にはそれをそこまで追い込んで授業をするのがいいというのだけれど、私はちょっとそんな授業を受けたら息苦しくなってしまうので、私が子供だったら「先生、私はどっちも言えない、勘弁して」って言うのではないかなと思いました。

所澤 どうもありがとうございました。それでは、最後に飯塚先生、社会科主任会ということでもありますので、最後に一言、今日の全体の総括を——シンポジウムの前の授業を含めて。

飯塚 私は社会認識を深めるための、多様性という

話が出ました。そのことに私も、——「ダム」から、非常に価値ある情報を得て、そしてそれを子供達に提供していくということは、子供達の見方、考え、認識をより広げる形に繋がるのかなというふうに思いました。

それから、最後、よろしいですか、社会参加という話がありました。以前こんな授業を見せてもらいました。4年生の消防署の授業なんですけれども、役割とか地域住民の暮らしを守ってくれることを学習するのですけれども、新聞の中で火災現場で子供を救った記事があって、1分遅れたら子供の命は救えなかった。そんな記事を読んだ子供が、「自分の姿勢が消火活動を妨げることが多いのだ」と。「今まで（——女の子です。）私は火事が起こると現場に行くと野次馬になっていったんだけど、やはり、それはいけないのだな」と、「これから自分の生き方として火事が起きたら、そういう所に行くと野次馬の一員になるのはやめたい」と。これは自分の行動が消火活動の妨げになっていたのではないかと。自分の生き方について、新聞の記事から「これはまずいのだな」ということ、——一つの行動としてその子供がそんな感想を述べていました。

そういった中に子供が生き方というのをそこから学んでいくものがあるのだな、新聞というものは非常に、子供の行動、社会参加を促す、——参加とっていいかわかりませんが、そんな一面もあるのだな。

火事の火災件数や火事に関わる報道から「ポスターをつくりたい」とか、「啓発していきたい」と、そんな子供もおりました。直接参加で地域住民の清掃の活動からゴミのリサイクルに参加していったりとか、そういった部分もあります。ということで、やはり新聞というのが子供達の生き方にうんと影響してくるんだなということで、今後もそういう形で有効に活用していくことが大事なことになるかなと思いました。以上です。

所澤 どうもありがとうございました。私の拙い司会でちょっと時間が延びてしまったのですが、今日

のシンポジウムですが、「NIEの価値」「新聞を活用するという価値」についてある程度みなさんに理解を共有していただけたのではないかなということを感じています。ただ、NIEと新聞活用がどう違うかという問題が私はまだ触れずに残っていると思うのですが、これはまた、群馬県のいろんな活動の中でも追究していきたい問題だなというふうに思っております。それでは、今日はこれでこのシンポジウムを終わりにしたいと思います。どうもみなさんありがとうございました。

（拍手）

総合司会（石川） たいへんパネリストの先生方、所澤先生ありがとうございました。

（終了）

註

- (1) 所澤潤・石田成人・関口修司・吉成勝好・渡邊祐希「授業改善のためのNIE—群馬県板倉町立北小学校NIEシンポジウム2010の記録—」『群馬大学教育実践研究』第29号、2012、pp.141-161
- (2) 所澤ほか、前掲、p.142
- (3) 所澤ほか、前掲、p.142
- (4) 所澤潤・岩上薫・吉成勝好・赤池幹・関口修司「教室の壁を取り払うNIE—東京都北区立王子第三小学校NIEシンポジウム2009の記録—」『群馬大学教育実践研究』第28号、2011、pp.227-240
- (5) 解説及び註(3)参照。

（しょざわ じゅん、あかいけ みき、
いづか としお、いしだ なりと）